

ミステリ読書案内

2024. 5. 22 発行元

第576号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

白川尚史「ファラオの密室」

今年の『このミステリーがすごい!』大賞の受賞作。1月に宝島社から出た白川尚史の『ファラオの密室』を取り上げる。新刊書店の平台に山積みになり、それなりに売れているようなので買って読んでみた。

書店で見た時の印象

私は受賞作品の単行本は基本的に買わない。江戸川乱歩賞受賞作品は随分しばらく読んでいない気がする。年末の各種ミステリ・ランキングが発表されて、その中のベスト20に入るような作品があればその時点で「読んでみようかな」と重い腰が上がる流れが通常。でもまあ今回の『ファラオの密室』は「買ってみようか」と思わせる雰囲気があったと言えるだろう。

「古代エジプト」と「密室」がポイント。そして帯に「空前絶後の本格ミステリー」と書いてあるのが決め手になった。

アクエンアテン王の時代

古代エジプト第18王朝の時代。ファラオのアクエンアテン(アメンホテプ4世)はそれまでの多神教のアメン信仰から唯一神アテン信仰に変え、都も強制的に遷した。

物語の主人公セティはアクエンアテン王のピラミッドの石室の中で崩れてきた土砂に埋まって死亡

した。半年かけてミイラになった後、冥界の入口で心臓の一部が欠けているという理由で、死者の審判を三日間だけ猶予されて、現世に戻り自分の死の原因究明と欠けた部分の回収を命じられる。

現世に舞い戻ったセティは友達をはじめとする関係者から情報を集めていく。セティは神官書記をしていたので、アテン信仰に対する神官団の反発にも巻き込まれていたのだという展開。

ピラミッドの中の密室

題名にもなっている「ピラミッドの中の密室」。ピラミッドは基本的に花崗岩を積み上げて作られているのだが、アクエンアテンの王墓には密かにもろくて崩れやすい砂岩が組み込まれていたのだ。ということで、トルコから連れてこられた「カリ」という奴隷の少女がこの石の運搬現場の様子を伝える形になっている。

セティは石室の中で短剣で胸を刺され、なおかつ土砂で下半身を押しつぶされる形で亡くなった。その

「このミステリーがすごい!」大賞

宝島社が主催する長編ミステリ(エンタテインメント作品)の新人賞。現在一番勢いのある賞かもしれない。「大賞」と「文庫グランプリ」を選ぶほかに候補に挙げられた作品の中から「隠し玉」の形で出版されることもある。今回取り上げた『ファラオの密室』は大賞受賞作品。

これまでに22回実施しているが、歴代の受賞作家を見てみると海堂尊と中山七里が群を抜いて実力者だと思う。

場にいたのは二人。現世に戻ってその二人にも話を聞くのだが…。

この密室トリック。実のところかなり苦しい。図を使いながら説明されているが、実際にうまくいくかどうかはわからない。成功する確率は低いのではないだろうか。

次回作で実力が判明するのでは…

本作品。古代エジプト社会を描いているが、当時の人達がこのように考えていたのかどうか気にかかる部分も多い。なにしろ3000年以上前の話なのだから。ただ作者の挑戦してみようという意欲は素晴らしい。ミステリとしての出来は中程度。次作に期待。次にどんなテーマの作品を書くかで実力の程が見えてくるのではないだろうか。是非「本格もの」であってほしい。

栗本薫「ネフェルティティの微笑」

「古代エジプト・ミステリ」ということで頭に浮かんだ本書を取り上げてみた。1981年に『別冊中央公論』に挙掲載された後単行本になった。当時私は栗本薫ミステリを全部読もうと思っていたので(その後とても無理だとわかったけれども…)『別冊中央公論』を買って読んだ記憶がある。40年以上前の私の話だ。彼女の初期の頃の作品のひとつ。

「ネフェルティティ」は上記『ファラオの密室』に登場するアクエンアテン王の正室。ツタンカーメン王の義理の母である。ツタンカーメン王はネフェルティティの娘と結婚している。ネフェルティティの出自については諸説があり、その生涯についても不明の点が多い。ベルリン博物館にあるネフェルティティの胸像が特に有名である。古代エジプトの彫刻家トトメスによるものと伝えられていて1912年にエジプトのアマルナで発見された。石灰岩に漆喰で肉付けし、その上に彩色が施されている。

栗本薫の本書は現代を舞台にしている、大学生の森岡秋生が主人公。恋人を実の兄に奪われて心に傷を負った秋生は失恋旅行としてエジプトへ出掛ける。カイロのエジプト博物館で出会ったのが小笠原那智。彼女はネフェルティティそっくりの容姿でエジプト人の夫と暮らしていた。秋生は彼女と一緒にピラミッドに入り…。